思い新たに！
―あなたのことを忘れない―

河野　学　陸自81

1　靖國神社

昨年の8月15日、新たに遺骨収集の職務に就くに当たり、節目と考え、久しぶりに靖國神社に参拝した。終戦記念日は初めてであるが、その人の多さに驚いた。昼過ぎ、その時は拝殿まで参拝待ちの約70～80メートル程の列ができていた。それは2時間の遊就館研修後も変わらなかった。最近の傾向であろうか、若者そして外国人の多いことにも驚く。彼らはどんな動機で参拝するのだろうか？　靖國問題で話題になるから来るのか？　靖國問題は歴史上、外交上難しい問題を抱えておりそれだけで誌面が尽きるので、参拝して感じたことを述べてみたい。

若者達は拝殿でお賽銭を納め、ぎこちないながらも神道の拝礼をし、頭を垂れる。その姿を見ると、案外真摯な気持ちで参拝しているのかもしれない。親族に英霊が祀られており、その縁で来ている者もいるであろう。英霊はもう彼らの曾祖父くらいの年になるのか？　靖國や歴史問題について深くは勉強していないであろうが、戦没者に対する尊敬と感謝の念だけは伝えているに違いない。

外国人は靖國問題など念頭になく、観光名所としてガイドブックにあり、神社の神道的雰囲気を味わえる場所として訪れているのであろう。過去には各国の政府要人、在日米軍司令官や各国の士官候補生等の軍人が正式参拝をしており、これは諸外国も国家の戦没者追悼の中心的施設と認めてきた証ではなかろうか？　今訪れる外国人も国のために戦った者をリスペクトして参拝していると信じたい。もし靖國神社が軍国主義の亡霊を引きずっているならば、こういう人々の参拝はあり得ない。

遊就館では数体の花嫁人形が飾られている。これは妻を娶ることなく若くして戦死された英霊に対し、そのご家族から奉納されたものだ。

「武一」と貴男は本当に偉かった。二十三歳の若さで家を出て征く時、今度会う時は靖國神社に来て下さいと。雄々しく戦った貴男だった。どんなに厳しく苦しい戦いであっただろうか。沖縄の激戦で逝ってしまった貴

男。年老いたこの母には、今も二十三歳のままの貴男の面影しかありません。日本男子と産れ、妻も娶らず逝ってしまった貴男を想うと涙新たに胸がつまります。今日ここに日本一美しい花嫁の桜子さんを貴男に捧げます。私も八十四歳になりましたので元気でおりましたら又逢いに来ますよ。どうか安らかに眠って下さい。ありがとう」と母の手紙。これは昭和57年のこと、今はその母もいない。

花嫁人形は女性にも奉納されている。従軍看護婦として若くして戦死した姉妹に花嫁衣裳を着て欲しかったと姉と妹から…あなたのお陰で今の幸せがある。私達の身代わりで…と切ない感謝の思いを伝えたかったに違いない。

2　護國神社、忠魂碑は？

各県の護國神社はどうであろうか？　靖國神社と違い遺族以外に参拝される方は稀だという。その遺族も高齢化が進み参拝する方も年々少なくなっている。私は先般静岡県の遺族会研修会の講演を聞く機会があった。講師は、父を戦争で亡くされた知事経験者で県内の忠魂碑を自転車で参拝されたという。その原点は故郷の村の自分が学んだ小学校の忠魂碑。終戦後ＧＨＱの占領下、忠魂碑が撤去され池に埋められた。この占領政策が終わった後、全国の忠魂碑は神社、平和公園、小学校、公民館等に移設し保存された。氏は50歳頃から体力の衰えを痛感、一念発起し自転車による琵琶湖一周を始められた。知事に就任後県内２１９カ所の忠魂碑、延べ１２００キロを約１年をかけて参拝された。その時の笑うに笑えない出来事。

「この辺に忠魂碑ありますか」。すぐ応えてくれる人もいるが、中には「忠魂碑って何ですねん」、「英霊が祀ってあるんですよ」、「英霊って何ですねん」、指で書きながら「英国の英と霊ですよ」、応えて曰く「それはイギリスの碑ですか」。

氏は知事退職後も全国25県の護國神社の自転車参拝も実行した。上り坂を克服し「足よりもケツが痛い、きついのは帰りも自転車だ」。ここでも笑えないエピソードを語られた。

・奈良県

護國神社は県庁所在地にある。鹿の煎餅を売っている人に聞いても知らないと言う。観光案内所ならばと20歳代の係員に聞くも知りませんと言う。地図にも載っていない。氏は若い人を責めても仕方ない、教えていないのが悪いと自分で探そうとした。すると若者はインターネットで探し、後を追ってきて教えてくれた。やっと参拝しその話を宮司にすると「うちのトイレだけは載ってます。それでよう借りに来やはります」と苦笑されたという。氏は「それで納得するんですか。それじゃ英霊が浮かばれんでしょう！」

・石川県

兼六園の近くにあるのは知っており、近くの派出所に聞きに行った。「只今巡回中、急用の方は下記に電話を」で留守。そこに地図の表示板があり確認した。公共施設、観光施設、神社・仏閣、その他に区分されているが護國神社が見当たらない。何故神社・仏閣のところに載っていないのか？　氏はさすがに怒り心頭に発し電話をした。若い警察官を責めても仕方がないが「あなた達が命を張って仕事していることには心から感謝する。しかし戦没者は国のために駆り出され、命を懸けて戦ったんだよ。それなのに、なぜここに出てこない。このことを、しっかり上司に報告してくれ」。これには宮司も嘆かれたという。

3　国の骨幹

どうしてこうなったのか？　忠魂碑や護國神社を忘れたのではない。教えられていないのである。それは、戦後のＧＨＱの占領政策が成功したからである。戦争の勝ち負けは、考えが正しいか正しくないかで決まるものではない。戦のやり方が上手いか下手かで決まる。しかし、勝った者が負けた者に「教育がおかしかったんだよ」と言う。「軍隊を保有しないのが日本が平和になる道だ」と憲法に明記させた。そして時代背景が変化しても未だにそれを信じている人がいる。実質的に国を守る自衛隊がいるのに。ことの本質は何であろう。それは自分の国のことは自分の国で考えるということに尽きるのだと思う。中国、韓国にも侵略されたとする言い分はもちろんあるであろう。それを基に両国が外交カードとしてＡ級戦犯を持ち出し、有利な立場を維持しようとするのは外交戦略として至極当然のことではあるが、それに惑わされる必要があるのだろうか？　国の為に戦った戦没者

の犠牲、その思いを如何に伝えるかであり、どの国もやっている。しかし、そのやり方は国によって違う。慰霊のやり方が国際的にこれでなければならないということはあり得ない。文化や戦没者の思いを背景にその国が考えるべきことである。国家が名誉ある戦死として称えることが万国共通の戦死者に対する欠くべからざる礼である。それが国の骨幹ではなかろうか？

敗戦国でよく日本と対比されるドイツは、ホロコーストのナチスドイツの背景がありながら、教育は英米に教えてもらわなくてもよいと独自の政策と教育を施した。国を守る連邦軍の規定が基本法に明記された（統一が前提であり基本法は仮称。但し統一後も憲法と呼称せず）。日本とは違い62回の改正がなされている。そして遺骨収集について、日本は戦後「福祉」と捉え厚生省が担った。本来福祉とは子供、老人、障害者等弱者のために行うものであるが、終戦後から続いた風潮の中で曖昧にされ現在に至っている。ドイツは国防そのものと捉え国防省が実施している。軍人は自分達の先輩であり情報、人材、装備を有している。軍隊が担当するのは世界の常識である。「戦争犠牲者の援助は福祉ではなく国防だ。そうでなければ誰がいざという時に戦場に立てるか」という強い信念に基づく。そして驚くことに遺族会も英霊に応える会もないという。何故ないのか？　要らないからない。遺族が求めることは運動しなくても政府がやる。そうしないと政府がやることができない、国が成り立たないから責任・義務によって遂行する。戦後日本は戦没者の妻の面倒をみた。だが子供のことは後回しになった。ドイツは妻のことを、一生面倒をみた。それに加え遺児の教育も「好きなだけ学べ。費用は全額国が負担する」と責任をもって実行した。日本はできなかった。それがある意味現在の風潮に繋がる遠因にもなっていると思われる。

4　忠魂碑を残す

翻ってこんなほっとする話もある。英霊顕彰活動として「平和の道標」設置運動（子供達に戦争の悲惨さ、平和の尊さを理解してもらうため、分かり易い文章にカナをふった道標［目立つように白い文字］を慰霊碑の脇に設置）をしておられる外木氏から次の情報を頂いた。

それは静岡県袋井市浅羽北地区の話である。今、全国各地で戦争の記憶が薄れる中で遺族の高齢化・遺族会の会員減少と相まって、忠魂碑を管理・整備する者がいなくなり取り壊す動きが出ている。この地区においても自治連合会が令和３年３月に地区の忠魂碑を取り壊すとの情報が１月に市の遺族会会長の元に届いた。遺族会の高齢化に伴い、忠魂碑周辺の整備ができなくなったので自治会にお願いする。しかし依頼された自治会も状況は同じであり、また遺族ほど思い入れもないため、放置するか撤去・取壊しが自然な流れとなる。撤去の動きに対しどのようになったのか？　約２年に亘る活動が行われ保存、じ後の整備の道筋まで漕ぎつけた。

①　市歴史的遺産保存会代表及び遺族会会長を世話人として保存のための会を設立

②　令和３年１月下旬：自治会連合との話合い開始

この時期、費用の負担、業者、脱魂式の日を決め５月までに取り壊すことに決定済み

③　２月下旬：市長に要望書提出

戦争という悲劇的な事実を後世に伝える貴重な歴史遺産であり保存すべき

④　同上：自治会連合会長と面談、要望書を提出（市の忠魂碑管理の在り方の検討に対する回答があるまで撤去を延期）

⑤　３月上旬：市長に忠魂碑管理の在り方を検討するよう要望

他市の状況等も調査し、市の方針を検討すると回答

⑥　７月下旬：忠魂碑保存を願う有志からの要望書を市に提出

・撤去や地区外へ移設しないよう強く要望

・忠魂碑の再整備は、自治連合会が主体となり自治会員の中で協議

⑦　８月上旬：県福祉部と協議

「国内民間建立慰霊碑移設等補助金事業費交付要綱」を活用し忠魂碑を歴史的遺産として残す方策検討を要望

⑧　11月下旬：慰霊碑・忠魂碑管理に関する市方針の説明受け

・遺族会を中心に地域において大切に管理

・可能な限り現在の場所で現状のまま管理することが第一義

・市文化財保存活用計画に位置付け

できるよう努力

・碑の歴史的な意味を正しく伝えるとともに、保存していく中で平和の尊さを伝える。

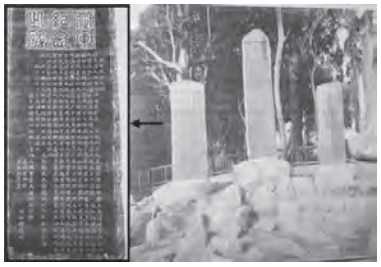
⑨　令和４年１～３月：市の方針を受け自治会で今後の管理・整備の在り方を協議

⑩　同５月：忠魂碑の周辺整備委員会設立

・趣旨：戦争に纏わる遺産が失われていく中、平和を繋ぐ歴史的価値は大きい。地域に根ざした歴史的遺産・平和を繋ぐ象徴として石碑を後世へ継承するため忠魂碑周辺の整備を行う。

・予算：県の助成金、趣旨に賛同する地区住民、他地域の賛同者等の寄付金（95万円の寄付）

⑪　令和５年３月：半年の工事後、忠魂碑整備事業完成の集いを挙行



袋井市浅羽北地区忠魂碑
（左は平成３年に再打碑）

5　いざという時のために

中立国スイスの軍隊の保持は知られているが、平和国家として話題になった仏教国ブータン。この国は人口約70万人、その国が１万人近い軍隊を保有している（人口の１・４％：日本に換算すれば１７０万人）。何故か？「チベットのように中国に侵略されるのは嫌だ」「先ずは戦う。戦ってこそ周辺の国が助けてくれる。自分が犠牲にならないで誰が助けてくれるか」。この考え方は今回のウクライナのロシア侵攻に対する各国の対応に如実に示されている。いざという時に自分が家族、国のために戦えるのは、残された者が必ず面倒をみる、自分の生きた証を大切にしてくれると信じるからである。

明治以来の大戦において、国や国民は村から戦争に征く若者を日の丸を振り歓呼の声で送り出した。「頑張って来て下さい。国のためです。皆のためです。銃後の守りは任せて下さい」と言って。それは戦没者に対する生前の約束であった。この言葉を信じて彼らは戦場に赴いた。花嫁人形の母の手紙からも分るように靖國神社に祀られることが、英霊達の報国の印であり自分の生きた証であった。村の先輩、小学校の先輩が戦地に赴いたのである。この先輩達の犠牲の上に今の私達の幸せがある。このことを肝に銘じるべきである。英霊顕彰、遺族への世話や慰霊祭の実施は遺族会を中心に行われてきた。しかしながら今、意識を変え国民全体の問題として捉えるべきである。そうでないといざという時に立ち上がる者はいない。

6　思い新たに！

先ず上記の忠魂碑保存事業にかけた努力は、モデルケースになるに違いない。ポイントは

①　行政を当事者として巻込む：今回、市（長）が前向きに取り組んだ。その際、子供の教育を含めて取り組むことが大切。

②　忠魂碑等は、建立の趣旨（郷土の先輩の慰霊）に添い、可能な限り現在の場所で管理することが第一義

どうしても不可能な場合、平和公園、神社、小学校等への移設を視野

③「国内民間建立慰霊碑移設等補助金事業費交付要綱」を活用して忠魂碑を歴史的遺産として残す方策を検討

この要綱を周知・徹底（存在さえ知らないのでは？　の懸念）

もう一つの柱は、今も現地に眠る英霊達のご遺骨を故郷に帰還させる事業である。私は67歳にして遺骨収集事業に従事することになった。各国が国防省を主体にこの事業を遂行している中、日本でも隊友会が組織的に本事業に参画し始めており、国本来の姿に近づこうとする姿勢が見られる。また、私はガダルカナル島の日本軍の宿営地であった地域の遺骨収集の映像を見たことがある。そこには砲弾も集積されていた。遺骨収集だけではなく、住民に被害を及ぼす砲弾の爆破処理も行われていた。その処理は石で作った竈に火をおこし、そこに砲弾を運び火の中に入れるという原始的な方法であった。小口径で威力が小さいとは言え、専門家から見れば危なくて見ていられないという状況であった。現実的な面からも自衛隊の協力は不可欠である。私も気力・体力の続く限り「一柱でも多くのご遺骨を祖国日本へ」の思いを新たにしている。